（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　飯島　幸子

本論文は、「社会変動と知識人の運命」という主題に、統一後の旧東ドイツにおける社会科学者のライフヒストリー分析を通じて、多元的歴史の観点からアプローチすることを目的とする。ドイツ統一という歴史的事実を入手困難な東側当事者の「経験」に即して詳細に記述することが本論文の第一の目的であるが、加えて個人の経験と集合的出来事とを「エイジェンシー」概念によって方法論的に媒介することにより、ライフヒストリー研究の手法を集合的な社会変動過程の分析に積極的に適用していくことをめざすものである。

本論文は、まず「大学時間」という時間概念を導入して大学改革及び統一以前の集合的出来事の記述を行い、続いて従来の安定した職業キャリアに対して多様性と分裂をもたらす「大学改革」の過程を解明し、さらにそれぞれの当事者がそうした変動に消極的、積極的に適応するプロセスを分析するという手順をとる。具体的に、第 1 章では、統一後 20 年を経た現在から見た統一の捉え方を総括し、多元的歴史及び「エイジェンシー」という本論文を支える基本コンセプトの検討を行う。続く第 2～3 章では、本論文が対象とするベルリン・フンボルト大学の講義要綱等の資料から大学組織とその変遷過程を解明し、インタビューデータを整序する時間的参照枠組みを構築する。第 4～6 章では、第 2～3 章を引き継ぎ、集合的出来事である大学時間、大学改革の過程をインタビューデータから再構成する。それらを踏まえ、第 7 章では集合的な変動過程に関わる当事者の適応類型を「円満」「降格」「転出」「転身」「失意」の５つに分類して提示すると同時に、そうした多様な適応をもたらす要因（研究領域、ジェンダー、旧体制との関係）を分析する。第 8 章では、統一という出来事を構成する多元的歴史の諸相の中で、知識人の運命を分けた多様な選択の過程を詳細に分析する。

本論文の審査過程で、エイジェンシー概念のさらなる学史的レビューが必要ではないか、データの集計と提示方法に若干の工夫が必要ではないか、当事者の発言からの引用が多すぎるのではないか、などの意見も出されたが、本論文は以下の観点において社会学に対する学問的貢献が少なくない。すなわち、(1)「大学時間」という社会学的集合的時間概念を導入することにより、社会的行為者と社会構造をめぐる重層的関係を記述する独自の枠組みを提示している。(2) 入手困難な当事者の膨大な発言を丹念に収集、整理し、そこから社会の構造的変動を内在的かつ立体的に描き出している。(3) 部外者（日本人研究者）という、時にライフヒストリー研究の制約となる「位置性」を積極的条件へと転換し、利害の錯綜するドイツ人研究者どうしでは解明困難な統一の実情を当事者の経験に即して詳細に記述している。

よって当審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値すると判定する。